

りびんぐらいぶず 平成二十一(二〇〇九)年三月第三号

## 念仏の衆生を摂取して捨てたまはず

ご講題 光明遍照十方世界、念仏衆生摂取不捨(光明は、あまねく十方世界を照らし、念仏の衆生を摂取して捨てたまはず)

(Ref『仏説観無量寿経』註釈版聖典 P102)

### 一、仏願はなぜ起こされたのか、またその結果は

浄土真宗は、本願力回向のお名号により凡夫が救われるみ教えであります。その背景をお訪ねしてみれば、初めに苦しみ悩む衆生があったのであり、これを放置できず、何とかして掬い取らずばおかないというのが真実の世界から大悲発動された法蔵菩薩でありました。

では、「苦悩の衆生」とは誰のことでしょうか。苦悩の衆生とは他ならぬ私なのであります。その私を救い取る為に如来先手のご苦勞によって遙かな昔に衆生救済に働き出して下さったのであります。

法蔵菩薩は師仏の世自在王仏のみ許で苦悩の衆生を一人残らず救い取ろうという御本願をお建てになりました。ところが、衆生は三毒の煩惱というとんでもない病持ちだったのです。これにはさすがの菩薩が御本願をお建てになるのにも五劫もの長き思惟を必要とされたのです。言い換えれば、法蔵菩薩の本願建立に五劫もの永き思惟を必要とさせたものは、他でもない私の罪の深さであったことであります。

弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、されば、それほどの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめたちける本願のかたじけなさよ(Ref『歎異抄』後序、註釈版 P853)。

「それ程の」とは菩薩に五劫もの永き思惟をさせた程のという意味です。

かくして建立されたご本願は、菩薩自らお名号に姿を変えて衆生の一人一人の胸の中に直接飛び込んで掬い取ろうという本願だったのです。

リビングライブズー「念仏の衆生を摂取して捨てたまはず」

その御本願を完成なさるのに、菩薩は兆歳永劫(ちょうさいようごう)のご修行を重ねられました。永劫の「永」は、永久の永です。私たちの想像もつかない長い時間であったことが読み取れます。このご修行の間、法蔵菩薩は一念一刹那たりとも清らかなお心でなかったときはなかったのだと伝えられます。このため、やがて完成されたお名号にはご修行中の清らかなおこころがまことのお心(至心)として込められているのです。

### 二、お名号とは何か

お名号とは何か。一番ポピュラーでなじみやすいのは「南無阿弥陀仏」です。それではお尋ねしてみましょう。

Q 「南無阿弥陀仏」とはどう読むのでしょうか。間違ってもご安心下さい。先年宗学院別科で同じ質問が出され、お答になられた御方の回答が奮っていました。「南に阿弥陀仏なし」と。なるほど、阿弥陀仏は西方極楽浄土の教主ですから、南方に阿弥陀仏なしといっても矛盾しません。

でも正しくは、「阿弥陀仏に南無したてまつる」と読むのであります。けれども「南無したてまつる」ではどういう意味がよくわかりません。実は「南無阿弥陀仏」は、インドの言葉の音訳なのでそのままでは意味をなさないからです。その意味するところは「ナムアミターユス(限りない命の仏に帰依し奉ります)ナムアミターブハ(限りない光の仏に帰依し奉ります)」であって、「南無阿弥陀仏」は両者を一つにしたものなのです。

これを中国語に意識したのが、皆様お正信偈でおなじみの「帰命無量寿如来」「南無不可思議光(如来)」なのです。寿命無量(第十三願)と光明無量(第十二願)のお誓いが完成したものなのです。

お名号の「名」とは、御本願をお建てになったとき(因位)のお名前であり、「号」とは、御本願が完成した後(果位)のお名前だご開山は仰せであります。既にご本願が完成したのですから、南無阿弥陀仏のお名号には「寿命無量」と「光明無量」の二つのお徳が込められてあるのです。

### 三、阿弥陀如来は、どのような仏様か

平成二十一年三月二十五日初版発行、二十一年三月二十七日改訂版 1

ご本願がお名号に姿を変えて苦悩の衆生の一人一人の胸の中に直接飛び込んで掬い取ろうという御本願だったのですから、阿弥陀如来はお名号と一つになって働いて下さる仏様です。蓮如上人はご文章で

この南無阿弥陀仏の名号を南無とたのめば、かならず阿弥陀仏のたすけたまふという道理なり(Ref「御文章」,「一帖十五通」註釈版 P1106)

と仰せです。でもお名前なら「阿弥陀」でよいのではないかといふかられます。なぜなら「南無」は「帰命」であり、「私は帰依致します」という帰依者の所信を述べたものと受け止められ、「仏」は尊称だからです。

実は、衆生には衆生自身の真の姿は見えていません。なぜなら私たちは自分中心に都合よく世の中を見ているからです。私は実は三毒の煩惱の衆生であること、それ故、私には自らの意思でやりとうせる善はあり得ないと思い知らされるのが赤裸々な私の姿なのです(観無量寿経)。

そうしてやっと愚かな私の真の姿を思い知らされ初めて本願力回向のお名号のお救いに恵まれてあることに私は感嘆の声を挙げるのです。

私自身の真の姿も知らず、それ故、救い主たる阿弥陀如来のいらっしゃることも知らない私にとって、阿弥陀仏に帰依するなどということは、如来様の御手許で全て完成して戴き如来様の方から本願力回向されたお名号の促しによって初めて明らかになる真実だったからであります。

このような次第で「帰命」は私の意志よりも先に如来先手の御手回しにより「帰せよの命」の心から私を喚び覚まそうという御力が働いて下さったことだということに頭を垂れることができるのです。

阿弥陀如来という私をお救い下さる如来様がいらっしゃることを知らなかった私に、「私はここにいるよ」と自らの存在を知らしめ、「ワレヲタノメ」「ワレニマカセヨ」と喚(よ)び続けに喚んでいて下さるのが「ナム」の御心なのですから、実はお名号というのは、「ナム」と切り離して成立せず、「南無阿弥陀仏」全体がお名号になるのであります。

尊号と申すは南無阿弥陀仏なり(Ref「唯信抄文意」,注釈版聖典 P699)

リビングライブズー「念仏の衆生を攝取して捨てたまはず」

またお名号となって働いて下さるそのお心を和讃では、次のように歌っていただきます、

十方微塵世界の 念仏の衆生をみそなはし  
攝取してすてざれば 阿弥陀となづけけたまつる  
(Ref「浄土和讃」,「弥陀経讃」(八二)註釈版聖典 P571)

このご和讃の「攝取して」のご左訓(言葉の意味を記した訓点)に「摂めとる。ひとたびとりて永く捨てぬなり。摂はものの逃ぐるを追わへ取るなり。摂はをさめとる。取は迎へとる」と示されてあります。

このことから阿弥陀仏とは、「攝取不捨(おさめとって決して捨てない)」のお心を本願招喚の勅命(後述)となって伝えようと働きどうしに働いて下さる仏様であることが知られるのであります。ご和讃のもとになったのは、ご讃題に掲げた観経第九真身観の御言葉であります。

善導大師は「攝取不捨」のいわれを「定善義」真身観釈で親縁(しんえん)・近縁・増上縁の三縁釈を施しておいでになります。

衆生行を起して、口につねに仏を称すれば、仏すなはちこれを聞きたまふ。身につねに仏を礼敬(らいきょう)すれば、仏すなはちこれを見たまふ。心につねに仏を念ずれば、仏すなはちこれを知りたまふ。衆生仏を憶念すれば、仏また衆生を憶念したまふ。彼此の三業あひ捨離せず。ゆゑに親縁と名づく(Ref「観経疏」,「定善義」註釈版聖典七祖篇 P436)

素朴な生活次元で念仏者の身口意の三業に則して相捨離せずよりそって下さる阿弥陀如来のお姿を有難く頂戴することであり、合掌(あと書き)フットプリンツという西洋の俗信(弊紙平成二十年三月号)との対比で、お名号のお救いを取り上げたことでもあります。(玄宥記)。

正覚寺仏教壮年会例会 毎月第一日曜午後八時より  
正覚寺仏教婦人会例会 毎月十六日午後七時より  
著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)  
〒五二〇 〇五〇 一大津市北小松四五二番地 ☎&Fax 〇七七 五九六 〇一六六  
✉・🌐・mhkatata@pluto.dti.ne.jp 使務 堅田玄宥

平成二十一年三月二十五日初版発行、二十一年三月二十七日改訂版 2